

京 都 大 学

結 核 研 究 所 紀 要

第15巻 第1号

京都大学結核研究所創立25年周記念講演

結 研 と と も に 2 5 年

植 田 三 郎

結研もいよいよ創立25年を迎えることに相成りまして、誠にお目出度う存じます。講演ではありませんで、想出話のようなことを申上げようかと思うのでありますから、どうかお気楽にお聞とりを頂きたいと存じます。結研の誕生前後のことは、当時私はまだ36、7才の若僧でありまして、年輩の先生方の御苦心、御相談を漏れ承っていたに過ぎません。それを思い出しながら申上げようかと思うのでありますから、或は多少思い違いをしているところもあるかと思ひますから、若し間違ったところが御座いましたなら、御列席の服部先生、木村先生に即座に御訂正下さることを、もえもってお願い致します。

25年は瞬く間に過ぎ去ったように感じます。振り返ってみて、感無量と云うところであります。こう云うことを申すと或は星野先生からお叱りをうけるかも知れませんが、感無量と申しましたのは、一つには、未熟児のようなひ弱な姿で生れ出ました結研が、よくまあここまで育ったものだと思うからであります。歴代の所長、其他教官、職員の努力は因よりであります。大学当局の、また直接には、医学部の温い庇護がなかったならば、到底今日の結研は存在しなかっただろうと存じます。

私、昭和12年の春に外国留学から帰国致しました。その頃のことを思い返しますと、医学部ではそれぞれの教室で思い思いに結核の問題を

多少ともとり上げていたようではあります。しかしどうも連絡も協力もすることは少かったようであります。当時は結核病学会に出席致しましても、医学部の先生方はどなたもおいではならない。京都関係では、当時宇多野療養所の所長であられた三戸時雄先生が役員にただお1人お名前を連ねておいでになっただけでありまして、何とも淋しい心細い想いをしたものであります。このような医学部の環境の中で、この六ヶしいがしかし乍ら重要な結核の問題に能率的にとり組まねばならんと云うことで、先頭に立って音頭をとられたのが、星野貞次先生であります。先生のお考えの一つは、医学部関係のところ、結核を専門に研究する総合的な研究所を設立しようとするものであります。結核の問題に特別に熱心であったとは申せない当時の医学部の環境の中で、このような企画をすることは、六ヶしいことであつただろうと存じます。星野先生の御相談相手は先程申しました三戸時雄先生であつたようであります。いろいろ御苦心があつたのであります。耕さない畑に急に作物が芽生えることは六ヶしく、一挙に研究所設立と云うようなことには到底参りません。それでは、研究所設立のよりどころ、基盤を先ず作ろうと云うことに成りまして、志を同じうする者が集って結核の問題を話し合う会を先ず発足させようとするに相成りました。星野、三戸の両先生の他に、松本信一先生、服

部峻治郎先生、木村廉先生、それから先年亡く
なられました戸田正三先生の方々の肝いりで、
昭和14年の初めに、「京大結核研究会」と云う
研究会が誕生致しました。会長は松本信一先生
で、その第1回の研究発表会が14年の10月に楽
友会館で開催せられました。以後年に2乃至3
回研究発表会を開催致しまして、研究発表、討
論の要旨は、「結核彙報」と云う雑誌を発刊し
て、それに掲載することに相成りました。第
1号は15年の5月出て居ります。この研究会
や、雑誌のお世話は、どうやら三戸時雄先生が
やっておいでになったようで、この「結核彙報」
と云う名前も先生の銘名ではないかと推測を致
します。

このような努力が積み重ねられて居りますう
ちに、研究所設立の予算が議会を通過、承認せ
られました。15年の年度末ぎりぎりでありま
す。詳しくは16年の3月26日であります。謂は
ば辛じて滑り込んだと云うところであります。
先程申しました先生方のお骨折りは因よりで
ありますが、更に井上硬先生の御奔走も大いに功
を奏した由承って居ります。このようにして官
制が公布せられ、星野先生が初代の所長に御就
任になりました。その他の主な人事、人選は、
星野先生はこれを医学部教授会に委任せられた
と承って居ります。人選が終って、どんな格好
で発足したかと申しますと、この表のようなこ
とであります。

表 1

所長 星野貞次(16.3.26)

◎結核の物理学的診断並に治療法研究(岩井)

○結核の化学的治療法研究<薬劑療法(内藤)
營養療法(榎林)

○結核の手術的治療法研究 (長石)

○結核の特異性研究<年齢特異性 (佐川)
臓器特異性

◎結核の細菌並に社会衛生学的研究 (植田)

部門の分け方、それぞれの部門の構成とか名
称等、今から見ますと、少し妙に思われるも
の、ほほえましいようなものもありますが、当時
としては、これで大真面目であります。研究所
の機構、運営には、最初からわかりにくい点が

幾つかありました。要するにこれは御苦心の結
果と申しますか、政治折衝の所産であろうと存
じます。その結果は、結研は生れ出るには出た
のでありますが、謂わば未熟児の運命を担った
訳でありましょう。この点われわれも勿論注意
深く努力をして参りましたが、大学当局なり、
また直接には医学部なりの温い庇護を有難く感
じる次第であります。機構、運営に最初からわ
かりにくい点が幾つかあったと申しましたが、
これは私の立場でわかりにくいと云うことで、
私として研究しつくしたと云う訳でもありませ
んから、余り大声に申上げられることでもない
かと思いますが、しかし、そのわかりにくい点
の幾つかは、今日なお尾を引いて、われわれを
困らせることがありますので、若い皆さんに申
上げて、結研の将来の充実、発展をお考え頂く
際に、参考にして頂けるならば幸に存じます。

先程申しましたような部門の構成で研究所の
予算が配当せられました。ところがその研究所
の予算とは別個に、病院予算と云うものがつい
て来たのであります。官制上では附属病院がな
いにも拘わらず、病院予算が別に配当せられま
した。しかも、これは医学部附属病院の病院予
算と一本になって配当せられまして、大学に來
てから分配すると云う一寸妙な手続きで来るお
金であります。そして140のベットとそれに見
合うところの看護婦其の他の定員がついて来た
のであります。附属病院はないが、研究所には
最初から診療科のようなものが一つくっついて
いると言う考え方、取扱い方であります。こう
云うことになると、臨床の方は一寸わかりに
くいことになって参ります。140のベットな
り、病院予算の使い方が問題になります。とこ
ろが、部門の構成を御覧頂いておわかりのよう
に、岩井先生と私だけが教授でありまして、自
然臨床の方は、岩井先生お1人で、他は内藤さ
ん、榎林さん、佐川さん、長石さん、すべて助
教授であります。勢の趨くところで、研究所の
内部では岩井先生をいつの頃からか、部長、部
長と呼ぶようになりました。しかし、私に対し
ては、誰も部長とは呼んでくれません。それ
で、この部長と云う意味が、次第に私にもわか

って参りました。こんなような事情が多年の間微妙な問題として、臨床の先生方を大分苦しめたようであります。私も間にはさまって随分苦勞を致しました。

表 2

第 6 回 講 演 會 開 催

日時 昭和16年11月16日(日曜)午前9時
場所 京都市上京區吉田町 樂友會館
演題募集 10月末日締切

京都帝國大學結核研究所内

京 大 結 核 研 究 會

結核研究所創立記念講演會開催

日時 昭和16年11月16日(日曜)午後1時半
場所 京都市上京區吉田町 樂友會館

講 演 目 次

1. 結核の細菌血清學的診斷に關する
二、三の問題 京都帝國大學教授
結核研究所員 植田三郎氏
2. 肺結核の早期診斷
京都帝國大學教授
結核研究所員 岩井孝義氏
3. 男子生殖器結核に於ける膀胱の變化
附 所謂上行性膀胱結核に就て
京都帝國大學教授 井上五郎氏
4. 結核雜題 醫學博士 三戸時雄氏

御 來 聴 を 請 ふ

研究所の発足を祝って催された記念講演会のプログラムであります。このような講演会を開いてくれたのは、先程申しました京大結核研究会であったように記憶します。こう云うものを御覧頂いても、京大結核研究会と研究所とが因縁浅からぬ關係にあったことをおわかり願えるかと思ひます。

このようにして、研究所の主な人間の構成は出来上りましたが、建物がありません。戦時下のことでもあり、いろいろ事情もあって建物が出来なかったのであろうと存じます。星野所長の御奔走のお蔭で、医学部附属病院の古い建物の一部分を借用し、内部を多少改装して、16年

の6月になってやっとの思いで業務を開始すると言う段になりました。私の担当の部門の方はまあまあ簡単でありましたが、臨床の方は仲々大変でありました。つまらぬことを申して恐縮であります。結核研究所でありますから、はっきり「結核研究所」と云う看板を掲げるのが当然のことではありますが、当時はどう云う時代であったかと申しますと、肺結核と云う代りに、肺炎加答兒乃至は肺滲潤、それでも都合の悪い際には、単に肋膜炎と言った時代でありましたから、臨床の方達としては、一つ心配があったのであります。結核研究所と云うようなハッキリした看板を掲げたのでは、果して患者さんが来てくれるだろうか、入院してくれるだろうか、と云う心配があったのであります。看板は便宜上何かもっとボーとした穏かな名前にして、その下え括弧をして小さく結核研究所と入れた方がよくはないか、とまあこんなことが会議の席上真面目な話題になりました。しかし、この点、われわれの頭は世間よりも一步遅れて居りました。業務を開始致しましたが、何の心配も要りません。岩井先生の外来は連日大繁盛で、受付の前には早朝から長い列が出来る始末でありまして、140のベットもたちまち満員になりました。岩井先生は連日早朝から外来診療、回診と大車輪の活動、患者や附添いの家族で外来も病舎も大変な賑いで、事務室も大張切りでありまして、お蔭で基礎關係の私など、どこで何をしているのかと言わんばかりの存在に成り下りました。

写真は発足して間なしの教職員の顔ぶれであります。16年は業務開始で忙しく、到底打ち揃って写真をとると云う余猶が無かったものと見え、やっと17年初夏になって次頁の写真を撮影致しました。星野先生はじめ、岩井さん、内藤さん、樫村さん、佐川さん、長石さん、私も含めて一同頭も黒く、若々しく、たのもしいな格好であります。

表3これは歴代の所長とそれぞれの部門の変遷を示したものであります。星野先生から永井先生まで六代の間は兼任所長でありましたが、7代目になって、研究所の専任の教授のう

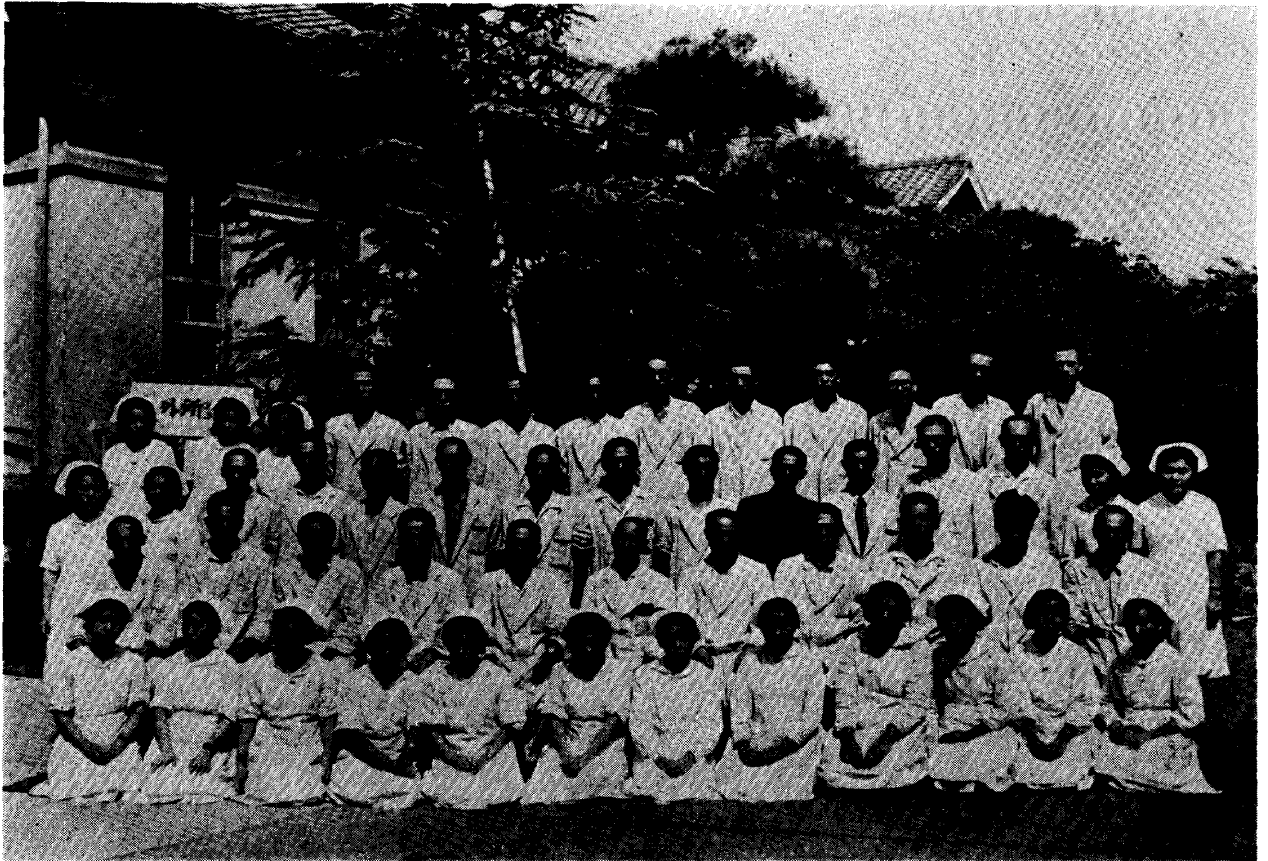


表 3

-
- (所長) 星野—服部—青柳—近藤—山本—永井—植田—内藤—長石
- 結核の物理学的診断並に治療法研究(岩井)——理学的診療学部(岩井)=(辻)——**内科学第2(辻)**
- 結核の化学的治療法研究<薬剤療法(内藤)——化学療法部(内藤)——**内科学第1(内藤)**
 栄養療法(瀧林)——生化学部(辻)——病態生理学部(辻)=(大島)
- 結核の手術的治療法研究(長石)——外科療法部(長石)——**外科学(長石)**
- 結核の特異性研究<年齢特異性(佐川)——予防医学部——
 小児特異性研究部(佐川)——小児部(小林)
 臓器特異性()——病理学部(家森)=(高松)——**病理学(高松)=**
- 結核の細菌並に社会衛生学的研究(植田)——細菌血清学部(植田)——**細菌血清学(植田)**
 ○細胞化学(高松)
-

ちから所長は選ばれるべきだと云うことに相成りまして、私が押し出された次第であります。しかし、途端に、医学部特に医学部附属病院との間に通じていたパイプが切れて了ったのであります。既に創立10余年を経た研究所ではありましたが、まだまだ医学部特に医学部附属病院との間に何本かのパイプが通っていないければ、一寸独り歩きの6ヶしい研究所でありました。私が短い在任中に、仮りに研究所のために何か役立つことをしたと致しますと、それは、何と

かして一本でも多くの、少しでも太いパイプを医学部特に医学部附属病院との間に引くために、いつも土を掘り続けたと云う位のことです。

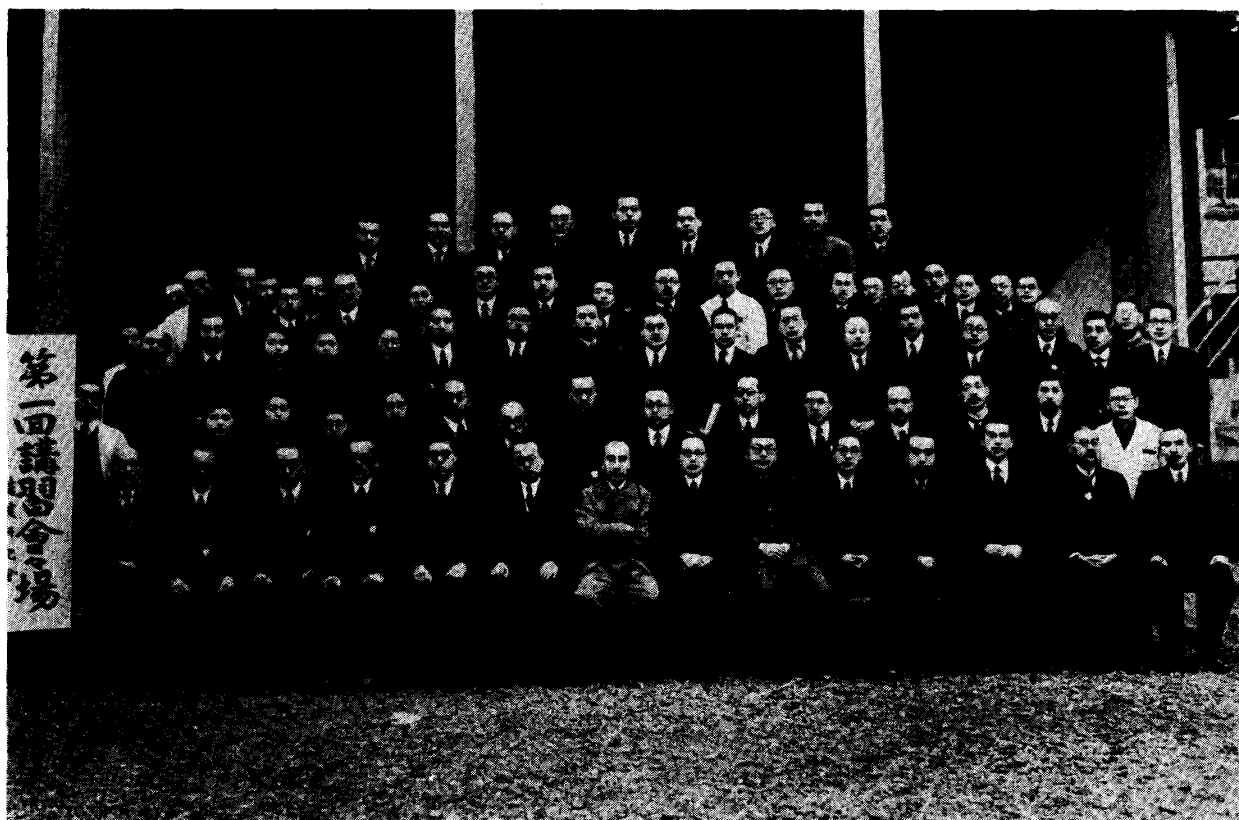
部門の構成には、当初からわかりにくいところがあったと申しましたが、それが次第に姿を変えて行くのでありますから、益々わかりにくいことになって参ります。上に出しました表からもおわかり頂けるかと思いますが、就中わかりにくい変遷を致しましたのが、化学的治療法

研究の部門と特異性研究の部門とであります。こう云うことから逆にお考え頂くと、研究所には当初から名目上は五つの部門があるにはあったのでありますが、実際上は満たされては居らず、助教授の椅子が適当に配置せられていたと言うに過ぎないのではないかと考えられます。幾変遷を経て後に、はじめて臨床関係三部門、基礎関係二部門が確認せられたのであります。

お話しを元に戻しますが、戦争が次第に烈しさを加えるにつれまして、結核主として肺結核が軍隊でも、其の他の職場でも、おそろしい勢で蔓延して参りました。臨床の皆さんは忙しくなって参りました。ところが、われわれ基礎関係の者も大多忙に相成りました。到底静かに好む研究をやって居ると云う訳には参りません。何故かと申しますと、その頃迄は、肺結核の診断の方法と申しますと、自他覚症状の他に、レントゲン写真を撮る、血沈を測定する位のところで、喀痰の塗抹標本をチール、カベツト法で染色、検鏡する場合がありますが、診断法としては、それほど重要視はされては居りませんでした。伝染病が病原菌の証明なしに診断せられると云うことは、われわれには到底考えられないことでありましたので、機会ある毎に、声を大に致しましたが、殆んど反響はありませんでした。ところが、結核がおそろしい勢で蔓延して参りましたのと、他方、培養による結核菌の証明が比較的手軽に出来るものだと言うことが、次第に知られるように、成りまして、細菌学的な診断の必要とその価値が漸次認められるに到りました。しかし、当時そのような方面に手を染めて居りました者は、比較的少数でありました。そのためであろうかと思いますが、われわれの極く手狭な研究室え、数名乃至10名内外のお医者さんのグループが1週間内外の泊りがけで、実習に次々に押し寄せたのであります。結核菌の取扱い方、菌検査法等の手ほどきに大忙しをしたと云うことであります。当時、私の関係して居りました学術振興会、学術研究会議の委員会に致しましても、また学会に致しましても、このような当面の必要に迫られた研究が主要な部分を占めて居りました。しかし、

こう入れ替り、立ち替り実習に押しかけられたのでは、落付いてわれわれ本来の研究が出来ません。そこで、次々に実習においでのお医者さん達を、何とかして穏やかにお断りして、研究室を静かにするのには、どうすればよかろうかと思案致しました。思案の揚句、実習の要項を整理し、それに多少の補足を加えて、1冊の本にまとめて出版することに致しました。此の本を読んで頂けば、態々実習においでにならずに御理解頂けると考えたからであります。当時、我国にはこの種の本がありませんでしたので、この本は各方面で可なり重宝がられた様子であります。ところが、物事は考えた上にも考えてやらねばならないもので、この本を出版致してから、実習者は却って増加し、おまけに、手紙による質問が来るようになったのには、われ乍ら阿然と致しました。

戦争は末期的と成りました。若い人達は皆戦争に出て了って、到頭研究室では、私独りきりになりました。研究資材も乏しくなって参りました。こんな事情で、特別な機械や資材を使わないで、独りで細々と出来るような研究を続けて居りました。それが結核菌其他のミコバクテリウムの発育様式の研究であります。黴菌、鼠黴菌もミコバクテリウム的一种と見られて居りますから、出来ることなら、この種の菌の極く初期の発育だけでも観察出来たならと念願しつつ、細々と仕事をして居りました。ところが、このような事情、契機でとり上げたテーマ、続けていた研究が、到頭20年、25年と続いて今日に到ったと言う次第であります。こう申しますと、独りで静かに研究室に居たように聞えるかも知れませんが、どう致しまして、他の用務のために非常に忙しく飛び廻って居りまして、たまさか時間をみつけて研究室に居たと言うに過ぎません。それは、若い人達が皆戦争に出て了って、どちらの学校も細菌学の講義、実習にこと欠くこととなったために、われわれが駆り出されたからであります。同時に4つ乃至5つの学校をかけもちで、講義、実習に走り廻って居りました。防空の服装で、空腹をかかえて、遠方の学校え出かける時には、列車の窓から乗



り降りすると云う芸当も演じました。

丁度此頃研究所で、結核の講習会を開催したことがあります。この写真は講習会の最終回の時の記念撮影であります。戦時下でもあり、国民服を着た人も少なくありません。それに一同やせて居ります。この講習会が好評でありまして、出来ることなら、もう少し広い範囲の研究者の話しを聞きたいと云う声がありました。そこで結核の講座を開催したらどうだろうと考えているうちに、敗戦を迎え、しばらくは大混乱で、何も手にはつきません。しかも、結核の予防、治療の方法、その考え方も少し乱れたように見受けられましたので、敗戦後しばらくして、研究所の皆さんの御協力を頂いて、21年の春から凡そ1年間毎週土曜日の午後に、「結核土曜講座」と云うものを開催致しました。医学部の先生方にも順次出て頂いて、有料の講座を開催致しました。都合で主催者は先程の講習会と同じく結核研究会と云うことに致しました。講座は或程度の成果を納めて終了致しました。しかし、話のしっぱなしでは如何にも惜しいような気が致しましたので、お話し頂いた先生方にお

願して原稿を頂戴し、編輯し、2冊の本にして出版致しました。24年から25年にかけて出ました「結核講座」第1輯、同第2輯がそれであります。マイシンやパスのまだ無かった時代のものでありますから、今この本をとり出して読んでみますと、何ともほほえましいような感じが致します。この出版の段になりまして、結核研究会ではどうも具合が悪いように感じまして、ふと思いついて結核研究所同窓会と云う名義に致しました。本の表紙には結核研究所編とありますが、出版の名義人は結核研究所同窓会会長服部峻治郎となつて居ります。まだ同窓会は実際上は存在した訳ではありません。講座料と印税の収入から必要経費を差引いても、なお当時としては可成りの額のお金が残りました。そこで、このお金を基金にして、同窓会を実際上発足させてはと考えた次第であります。内藤さんにもお手伝を頂いて、同窓会誌第1号を発行致しました。基金がありましたから、会費は徴収しないことにきめました。これが結研同窓会の発端であります。どうも、私はいろんな事を計画することの好きな男のようであります。研究

所の欧文機関誌の発刊を企画，提案し，御存じのような実にあつかましい名前をつけたり，また和文機関誌，総合談話会，研究所の公開講演会等を計画，提案致しました。これらの会なり雑誌なりの其後には私は常に深い関心を持ち続けて居ります。

マイシン，パスに続いて，ヒドラジットが登場して参りました。他方，金科玉条のようにもてはやされた人工気胸療法が急に治療界から姿を消しました。この辺りから後，結研がどのような歩みをして今日に到ったかは，大方の皆様も御存じの通りであります。研究所には最近基礎関係部門が1つ増えて，6部門の構成に相成

りました。また結研と云う看板も「結核胸部疾患研究所」と書きかえられようとする機運にあります。更には，多年懸案でありました建物が，長石所長の格別の御奔走で出来上りつつあります。今や研究所では，万般のものが変化，変貌しよう致して居ります。25年を経過致しました結研としては，それは当然過ぎる程当然のことかも知れません。われわれは精を出して荒れ地を耕し，種子を播きつけました。そして今やっとう苗が伸びて参りました。これを次の25年丈夫な太い樹に育てて頂くように，若い皆さん方にお願い致す次第であります。

（昭和41年7月2日）